

## 踏 み 跡 <My Mountains>

北アルプス

上高地周辺散歩

No.154

会社の WV 部の企画に参加し、上高地をゆっくり歩いてくることにした。

上高地というところは多くの登山者にとって憧れの地であるにもかかわらず、つらい入山第一日目か時間に追われる最終日にしか通過しないところだから……。それゆえ一度は散策だけを目的としてのんびり出かけてみるのも悪くない、と考えたわけだ。

昭和45年6月27日

メンバーより遅れて小坂さんと二人で11時20分の急行に乗りこんだ。梅雨時にこれだけの晴天は珍しい。快晴という字句そのままに「快い晴れ方」である。

松本電鉄、バスとスムーズに乗り継いで上高地へは18時05分に到着。薄暗い夕闇がすぐ傍まで迫って来る頃ではあるが河童橋からの眺めは水墨画のようにどっしりと美しい。

河童橋から1時間15分、途中でヘッドランプを出して歩き、今宵の宿徳沢園に到着。

宿の夕食で足らぬところは持参のニギリメシでカバー。

昭和45年6月28日

3時起床。まだ眠っているメンバーを尻目に小坂、北島兩名と長堀山ピストンを企て、3時25分に出発。

徳沢園を出て小一時間で周囲がほんのりと明るくなり始めた。

高度を上げるにつれて奥穂、唐沢岳、北穂、槍と姿を見せ、さらに高度を上げると涸沢、ザイテングラード、槍沢上部とその懐までが目に入ってくる。

そして前穂が橙色に染まる頃には、槍を起点としたすべてのピークとすべてのカールが大スペクタクルを描き出してくれる。

これらの景観の変化を、歩きながら時々振り返ることで発見できるというスリルがたまらない。

我々が長堀山の頂上とおぼしき所に立つ頃には、これらの山々はもう常と変らぬ光線の中に鎮座していた。それぞれの景色にはそれが最も美しく輝く一瞬があるが、ここからの穂高連峰の眺めには今生まれたばかりの太陽が投げかける橙色の柔らかく鋭い光が最も適しているような気がする。(下の写真：長堀山から)



下りは空腹も手伝って一目散に駆け下って一時間、8時01分に徳沢園に帰着。

ほとんどの客も、そして我々の仲間たちももう出かけてしまった後の静かな食堂で朝食をとり、9時10分に出発。3時25分から行動を開始しているので、日が高くなる頃にはもう歩くのが億劫になってきた。

明神でひと休み、田代橋でまたひと休み。6月の上高地にはひと休みしたくなるような場所が沢山ある。

ひと休みしてはスケッチブックのページを埋めるため、休憩時間が長引いてしまう。

先発メンバーの後を追って田代橋から中尾峠へ向かう。若さをムンムンさせるような笹の群。焼岳の熱をもらって湯気をたてるせせらぎ、足もとの移りゆく眺めに退屈することはない。

中尾峠からの眺めは、北アルプスの主な峰々の手前に座す峠ならではの眺めで、笹のざわめきの向こうに火山灰地を経て煙を携えた焼岳、蒲田川の谷をはさんで笠ヶ岳、抜戸岳、弓折岳と続く稜線、雲の中に上半身を隠した薬師の裾。体の熱気をさましてくれる快い風にも春から夏への香りが感じられる。

焼岳小屋でサイダーを飲んで、暮れる日に追われるように大正池旅館へ。

# 踏み跡 <My Mountains>

昭和45年6月29日

宿の裏手が大正池。4時に起床してボートの上からのスケッチ。  
水面に鮮やかな映像を落とす前穂、霞沢岳、六白山・・・etc。  
午前中のバスで上高地を出て、東京へは早い帰着となった。



上高地を歩くことだけを目的にした今回の旅を終えて、「上高地とはいかなる所か？」と自問してみた。  
答えは出た。「画布の前に立つ技術があれば、それを主目的に行ってみたい所」と。

後日譚：田代橋の上からスケッチした残雪の穂高に、クレヨンと絵具で色をつけてみたら良い感じになった。  
会社の「健保だより」の扉に採用していただいた。

以上